

英語教師のための 発問テクニック

英語授業を活性化するリーディング指導

田中武夫・田中知聡 著

A5判 272pp.
本体2,200円＋税

池野 修



丸ごと一冊「発問」—英語リーディング指導改善の鍵としての「発問」

「教科書本文を読む」という行為は、中学校・高等学校の英語授業における中心的な活動であり、おそらくこれからもそうあり続けるであろう。著者は、そのような英語授業の改善のためには、「発問」を工夫することが鍵になると指摘する。英語リーディング指導に関する書物は数多いが、「発問」という焦点化されたテーマについて様々な角度から掘り下げて検討したものは本書が初めてである。著者が「できる限り多くの発問を収集し、グループ化し、いくつかのカテゴリーに分け、その特徴や発問づくりのプロセスを分析していきました」(p. iv)と述べている通り、本書の中で扱われている発問の種類は極めて多岐に渡り、発問について考察すべき諸課題が詳細に吟味されている。

本書は6つの章から構成されている。最初の3章はいわば発問作成の基礎作業にあたる内容であり、発問の定義と授業における発問の役割(第1章)、英文テキストの様々な特徴(e.g. テキストタイプ、パラグラフ構造)に合わせた発問(第2章)、生徒の実態把握、指導目標の設定と発問作成(第3章)という内容になっている。引き続き2つの章はおそらく本書の「核」となる部分で、第4章では、リーディング指導を「導入」「理解」「思考」「表現」という4つの段階に分けた上で、それぞれの段階における発問のあり方について考察しており、第5章では、効果的な発問作りの原則や留意点を「本質性を高める」「間接性を高める」「意外性をもたせる」「多様性を引き出す」「偶然性を活かす」の5つに整理して解説している。最終章(第6章)では、発問を中心に組み立てた授業モデルが4

つ提示されている。

本書には様々な優れた点があり——特に、発問作成においてキーとなる概念が明示化され、豊富な具体例で例証されていること(囲みで提示された本格的な具体例だけでも全部で43にのぼる)、同じ英文を素材にして作った「問題のある発問」(一般によく見られるものも多い)と「優れた発問」が比較されていることなど——読者は「どうすれば効果的な発問を作ることができるのか」について実践的に考察することができるであろう。また、魅力的な構成レイアウト、個々の部分(節、章)と本全体との関係を捉えやすくするための編集上の工夫などのおかげで、本書は本当に「読みやすい(reader-friendly)」本となっている。

メインとなる解説文に加えて、英語教員が発問に関して抱く疑問を取り上げて回答した“Q & A Box”, 発問作成に役立つ実践的アイディアを提示した“Idea Bank”, 第二言語習得などの研究分野における、発問を考える上で有益な知見について解説した「英語教育コラム」なども効果的に配しており、いわば「多機能」を持った著書でもある。

「発問」に関する包括的な解説が本書には含まれているが、他にも、(i)発問における task authenticity (=「そのテキストを目にしたとき、どのような情報をチェックするのが本来的か」という観点から、そのような情報を対象とした質問を優先的に作る)、(ii)読解ストラテジー(reading strategies)の使用を促すための発問、(iii)生徒同士による質問活動(peer questioning)の可能性など、検討に値する内容もあるのかも知れない。また、本書の中にも簡単な解説は見られるが、発問と他のリーディング活動(たとえば mapping, summarizing, retelling などの読後活動)とをどう関係づけてリーディング指導を構成するかについても、本書を手がかりに考えてみたいところである。

『英語教師のための発問テクニック—英語授業を活性化するリーディング指導』は、リーディング指導改善の鍵としての「発問」について総合的に考察した著作であり、本書の中に盛り込まれている多岐に渡る実践的アイディアは、教師の発想を刺激し、新たな実践の創造をも促すであろう。

(いけの おさむ・愛媛大学准教授)